

エコロジー的価値を巡って

廣松渉『生態史観と唯物史観』を読む

廣松渉氏は、その遺稿『マルクスの根本意想は何であったか』のなかで「共産主義運動は、私有財産の廃止、貨幣の廃止、国家の廃止、等を志向するが、これらの物象は、一部「貨幣廃棄論者」や「無政府主義者」が企図するような仕方では、単純に廃棄することは不可能である。」としたうえで「一般に物象化された存在体を廃止するためには、当の物象化をもたらす「対自然的かつ間主体的な関係」そのものの総体を根本的に再編成することが要件をなす。」（注1）と述べている。そしてその場合の座標軸として「エコロジカルな価値」というものを掲げる。

もちろん資本制的商品経済社会という現社会体制のなかでは、生産・消費を内包した経済活動の統制原理が利潤の追求に一面化されていて、これを「根本的に再編成」することが緊要な課題である。そしてそのためには価値観の刷新をもふくむトータルな社会的諸関係総体の変革が不可避であり、その場合の価値基準として廣松氏は「人間生態学的（エコロジー的）な価値」を構想しているのである。しかしここでいう「エコロジー」なるものを短絡して、環境保護運動一般というようなものに解してはならないだろう。なぜなら自然環境と人間

存在を相独立なものとして分離し、人間主体の側の一方的な働きかけの所産として、客観的自然環境の危機が云々されるという発想自身が、われわれが超えるべき近代主——客図式の埒内で発想されているのであるから。

ブントは、今年の年頭論文（一九九五年）において、「欧米物質主義からのパラダイム・チェンジ」を志向すべく、地球的規模で深刻化する地球生態系の危機と、その下で深まる人間疎外を、克服すべき課題の俎上にのせてきた。それはちょうど通用的価値体系としての欧米物質主義を止揚し、妥当的価値たる共産主義社会の実現をもとめる、廣松実践論と同様のプロブレマティークに立つものである。

そこで本稿では、彼の「唯一社会経済的部面に踏み込んだ」（注2）とされる『生態史観と唯物史観』を取り上げる。この文章は廣松哲学の集大成である『存在と意味』の第三巻の第二篇「人倫的世界の存在構造」に直接関係する筈であった、「歴史哲学」を扱ったものである。その意味では残念にも志し半ばで成しえなかった課題ということにもなるのだが、最後まで実践的アクティビストとして生きた彼の視座と意想を引き受けて、この案件と対質し、廣松哲学の実践展開への方途を模索していきたい。

注1——状況出版『マルクスの根本意想は何であったか』P235

注2——講談社学術文庫『生態史観と唯物史観』P31、歴史観のパラダイムを問いなおす

一、唯物史観と生態史観

私自身、自分たちが「共産主義者」然として『共産党宣言』での「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。」というマルクスの提起や、『経済学批判』のいわゆる「公式」——アジア的↓古代的↓封建的↓近代ブルジョア的——のような歴史観について、これを全く無批判にというわけではないしろ、ある程度普遍的なものとして捉え、価値観的に問いなおしてくることを怠ってきた。

殊に人類の発展段階の史的区分ということを、単線発展に一元化して捉える発想がスターリン主義的な歴史観だといって退けつつも、現実には歴史を論じる際、不断に生産力の発展が歴史の駆動軸だと短絡して発想したり、西洋Ⅱ「先進国」、アジアⅡ「後進国」という図式で表現したりされるような、「あるべき」進歩史観を視軸にして、それを賛否するといった傾向が、案外拭いきれていない。

これに対して廣松氏は、例えば『共産党宣言』でのマルクスの例の発言は「唯物史観によって階級というものを特定の生産関係の編成に見合うものとして規定し、そして下部構造および上部構造における経済的・政治的・文化的全戦線にわたる階級的対立の動態的均衡とその遷移のメカニズムを経済的土台たる生産諸関係に定位しつつ説明する途を拓いた」(注1)と言う。確かに晩年のマルクスやエンゲルスは『家族・国家・私有財産の起源』などで展開されているように、モーガンなどの知見を取り入れつつ、原始時代の無階級社会とか、未来の無階級社会なども視野に入れながら歴史を論じており、単なる権力闘争論一般に還元されるはずはない。

その脈絡から言えば『経済学批判』における「公式」にしても、いまだこれを金科玉条化する人は、今で

は「日本共産党」とか、少数のスターリニストを除いてほとんど居ないにしても、あれはマルクスの失言だったとか言って否定してしまうのではなく、十九世紀当時の歴史的な制約の下での提起として受けとめ、現在の生態学・文化人類学・考古学などでの実証的な研究成果との対話を通じつつ、きちんと定式化することがいまま課題として残されているのである。

マルクスは『ドイツ・イデオロギー』のなかで「あらゆる人間歴史の第一の前提」として、「人間諸個人の身体組織ならびに彼らと爾余の自然との関係」(注2)ということ論じているが、これは現在のみにれば極めて生態学的な視点であるといえる。

デカルト以来の近代哲学における主体と客体、精神と物質といった二元論的な対立の止揚・克服を図るものとして、マルクスは人間界を自然界との現実的な相互規定の現場である「産業」に定位し、この視座をアン・ウント・フェア・ジツヒに確立した。これが『ドイツ・イデオロギー』での唯物史観の中身(注3)である。つまり当事主体と環境条件とを統一的な「系」として捉え、当事主体群の営為が Umwelt としての環境条件を改造しつつ、この改造的変様が生体群の在り方を逆規定すること、いわば自然と人間との物質代謝をつうじた歴史の形成ということが、そこでのポイントになる。

その意味では、マルクスの発想した歴史観をどのように、人類史としてのわれわれが引き継いでいくのか、という問題であり、極めて主体的な課題ということにもなるが、この問題に対し廣松氏は、梅棹忠夫の『文明と生態史観』との対質を通路に、マルクス派として唯物史観の見地から、人類生態学的知見をも勘案した歴史観の構案を暫定的に述べ(注4)ている。そしてそこでの「人間生態系遷移論」を検討し、マルクス(エンゲルス)にも元々あった生態学的発想に肉付けを加え、唯物史観の人類史像を明らかにしようとするのだ。

もとより始めから予断を排しておけば、梅棹「生態史観」そのものに某かの理論的卓越性があるなどと思う

のは間違いである。この論調は日本近代思想の系譜でいえば和辻哲郎の『風土』などの発想に近い、一種の地理的風土史観と言えなくもない代物である。しかし梅棹をも含め、京大人文研に集ういわゆる「新京都学派」（＝今西学派）との対質をもその射程において構想する廣松氏の構えに学びつつ、「ありしがままの唯物史観を復元する域を超えて、あるべかりし唯物史観の体系的な構築を」（注5）実現する第一歩を踏みだしていくことが肝要である。

二、生態史観とその視点

この『文明の生態史観序説』は一九五七年の『中央公論』二月号に掲載され、当時の論壇を賑わせたのである。

注1 — 講談社現代新書『今こそマルクスを読み返せ』 P71

注2 — 国民文庫『ドイツ・イデオロギー』 P42

注3 — 講談社学術文庫『生態史観と唯物史観』 P51

注4 — 同 P5

注5 — 同 P20

ったが、それは当時来日中であつたイギリスの歴史学者アーノルド・トインビーとの「論争」を意図して執筆されたものであつた。

梅棹忠夫は冒頭にわざわざ「挑戦と応答」という見出しを設けて、その問題意識を述べている。トインビーは『歴史の研究』という膨大な著書のなかで、現在地球上に残っている文明は十二世紀以来解体期に入っている。日本文明圏もその「ダメ」になりつつある文明の一つで、まだ健全さを残しているのは西欧文明一つだけだと主張する。

これに対して梅棹は、トインビーのような「地球の歴史、生命の歴史の尺度では、近々数千年の歴史などはみな同時代にすぎない」（注1）というように、トインビー説が歴史相対的な視点に陥っていると批判している。それについては確かに全うな批判であると思う。しかしそれに続いて、殊に日本の取扱い方が納得できないだとか、トインビー説を「文明論における西欧側からの挑戦」と受けとめて、「応答の名のりだけはあげよう」（注2）というように応接しているのだが、なにか頑迷で「為にする論争」みたいに感じてしまう。

ともかく梅棹の問題意識としては、トインビー説を批判することを通じて「現代の世界という空間の中で、日本がしめている位置の性格な座標を決定すること。」（注3）にあつたのであり、それが「高度文明国・日本」の提唱というように、そのナショナリズムは明らかなのであるが、ここでは彼の実存を批判してもしかたないのであつて、梅棹「生態史観」の「多くを捨棄ないし奪胎しつつ」（注4）その可能性に絞って対質していくことにする。

さてトインビーの「西洋——東洋シェーマ」では、世界の総体的把握が不可能だという梅棹は、文化の機能的な見方を導き入れることによって、歴史を捉え返していこうと図る。つまりそれぞれの地域での文化的要素が、どのようにくみあわさり、どのようにはたらいっているかを見ていこうとしているのだ。

具体的には、旧世界（世界を分節化する以前の世界の意）をバツサリと二つの地域に分けてしまう。曰く「第一地域と第二地域」である。いうまでもないことであるが、ここで言われる第一地域とは、西洋および日本であり、それ以外の国々はすべて第二地域として括られている。

第一地域においては、封建体制がのちに支配権をにぎるブルジョアを養成した。そして「革命」によって実質的な支配権を得ていく。反対に第二地域ではおびたしい「革命」を経験しつつも、革命以前の体制が第一地域とちがって専制君主制か植民地体制であったためにおおむね「独裁者体制」である。

このような区分を行う理由について、梅棹によればそれぞれ同一地域の内、歴史的展開における平行現象Ⅱ平行進化の跡を見いだすことができる旨をあげる。封建制に先立つ中世の宗教改革のような現象であるとか、「市民」の形成や自由都市群の発展、海外貿易などが第一地域のなかでは同時平行的に起きているからだという。だからといってヨーロッパと日本とが同様の文化圏で括られるというのはおかしいと思うのだが、批判は留保しつつ、彼が因って立つ歴史の動態的把握という発想について見ていきたい。

「ふるい進化史観は」と梅棹は、トインビーを念頭において応接を試みる。「進化を一本道とかがえ、何でもかでも、いずれは、おなじところへゆきつくとかんがえた。現状のちがいは、そこへゆきつくまでの発展段階の違いとみた」のである。しかし「生態学的な見方をとれば、当然道はいくつもある。第一地域と第二地域とで、社会がそれぞれ別の生活様式を發展させてきたところで、ふしぎではない。」（注5）というのだ。つまり歴史における多様性を認める立場から、トインビーの単系發展を否定し、多系發展を模索するところに、梅棹「生態史観」の面目躍如たる所以がある。

もとより梅棹は比較文明学を確立することが自らの課題であると主張しているので、トインビーにみられる従来の歴史観のように、文化の由来を視軸にする因果論的価値観からは一定自由である。そして梅棹は生態学に

いう遷移（サクセクション）を歴史の分野に応用して、この多系発展説を跡づける。

この遷移（サクセクション）というのは「主体と環境との相互作用の結果がつもりつもって、まへの生活様式ではおさまりきれなくなつて、つぎの生活様式にうつるといふ現象である。」（注6）アメリカの生態学者クレメンツによつて提唱されたこの理論の眼目は、なによりも「主体・環境系の自己運動」を宣揚したことにある。

梅棹はこの主体と環境の有機的統一「系」を「あてはめ」て「第一地域というのはちゃんとサクセクションが順序よく進出した社会である。（…）いわゆるオートジェニック（自成的）なサクセクションである。それに対して、第二地域では、歴史はむしろ共同体の外部からの力（気候や他民族との攻防）によつてうごかされることがおおい。サクセクションといへば、それはアロジェニック（他成的）なサクセクションである。」（注7）と結論づける。

そういった「あてはめ」はさておき、梅棹「生態史観」は、歴史を「主体・環境系の自己運動」と規定することによつて、いわゆる環境決定論とは別様の地平に立つ。それは人間をも含む、主体と環境との相互作用が、所与の環境的条件を変様させ、この変様された環境条件への主体側の適応が、（主体——環境）系の在り方を遷移させていく関係を指している。

例えばイギリスでの産業革命は、直接には木材資源の枯渇が原因とされるが、それではなぜイギリスが、ほかのヨーロッパ諸国よりも先に木材の枯渇を生じたのか。従来の歴史では全く問題にもされない要件であるが、生態学上フォレストランド（森林地帯）の西端部に位置する「イギリス森林の特徴」を勘案するとき、容易に産業革命の起源を推し量ることができるのだ。

つまり日照量の不足と貧弱な土地の影響で、もともと森林の再生力の弱かったイギリスでは、ノルマン民族の征服によつて瞬く間に開墾が進められ、人口の増加ももたつて木材の乱伐が進行した。そのうえ十三世紀以

降、牧羊が進められ羊によって下草が食い荒らされると、もともと貧弱な土地を含む生態系は壊滅的な状態になり、森林が枯れ果て、十六世紀には既に木材不足に陥ったというわけである。

こうして木材不足という環境的要因に規定される形で、燃料革命とよばれる石炭への燃料の切り換えが起って来たのであるが、またそれについてもイギリスは地表に近い炭層がたくさん存在していて、他国に比して容易に切り換えが可能だったため、工業化がより良く進捗したのだといえる。

このように見てくると、人間社会と環境的自然という生態系的な統一が最も明らかになるのが、イギリスの産業革命にみられるような、「産業」とか「生産」に則した場面であることがわかる。社会的生産活動の場は、人間の（対自然的——間主体的）生態の機軸であり、土台である。ゆえにわれわれが自然をも非有機的な身体として、統一された相で把握していく場合、なにを差し置いても、まず生産や産業の場に定位することが鍵をなしていくのである。

このように、生態史観（それ自身ではなくその発想）は旧来の実体Ⅱ主体主義的な構図のもとにおける、「○の歴史」とその複合としての世界的叙述を退けつつ、歴史の当体を生産の場に定位した生態論的な関係態の相で捉える。その意味では先に見てきたように、マルクスが提唱した唯物史観も（主体——環境）系の全一的な把握を成していくという点で生態史観と同一の地平に立つ。

「われわれはただ一つの学（Wissenschaft）、歴史の学を知るのみである。歴史は二つの側面から考察され得、自然の歴史と人間の歴史へ分けられうる。しかし両側面は切り離すことができない。人間が存在するかぎり、自然の歴史と人間の歴史は相互に制約しあう。」（注8）というマルクスの提起は、自然界と人事界とを包括する単一の歴史、その単一の歴史界を対象とする学として唯物史観が構想されていたことを示すものである。

この「歴史の学」は単なる歴史なるものを外面的に分析するのではなく、人々がそこに内——存在し、生命

活動を営んでいく諸関係を明らかにするものである。だから唯物史観は「経済決定論」でも「地理・環境決定論」でもない。いわば人間生態学的視座に立って、歴史観におけるパラダイム・チェンジを成したのである。ともあれ以上を踏まえたうえで、廣松氏の提起する生態学的視座の現実的な適用たる「生態学的（エコロジ―的）価値」の中身について見ていきたいと思います。

注1 — 中公文庫『文明の生態史観』 P80

注2 — 同 P81

注3 — 同 P81

注4 — 講談社学術文庫『生態史観と唯物史観』 P20

注5 — 中公文庫『文明の生態史観』 P39

注6 — 同 P100

注7 — 同 P104

注8 — 国民文庫『ドイツ・イデオロギー』 P37

三、価値観のパラダイム・チェンジを

最近よく目につくのが「地球にやさしい」だとか、「リサイクル」などのキャッチフレーズであり、環境保護をうたい文句にした「無農薬野菜」などの商品の氾濫である。地球環境の保護をもとめた企業のイメージ戦略であろうが、このような企業——民間を問わず環境保護運動がよってたつ価値観は、現行生産諸関係のもとで地球環境の危機が間違いなく起こっているにも関わらず、そこに視点をむけるどころか、それを「是」として安住している自己と、環境保護に携わっている自己との価値観上の乖離である。

まさに人類史的危機が招来している根拠は、現支配体制としての帝国主義がもたらした産業文明の編成にあり、単なる小手先の技術によって解決される問題ではないということとは明らかなのであるから。

その意味で「われわれは、今日、生態学的危機を前にして、財貨の（従って、生産と消費の）評価基準、経済的価値の評価基準を一新すべく、歴史的に要請されているのではないか？」（注1）と問いかける廣松氏の提起を真摯に受け止めねばならない。

現在の近代工業の副産物として、例えばフロンガスによるオゾン層の破壊が紫外線の大量の降散を引き起こしている、炭酸ガスによる地球温暖化の問題によって南極の氷が解けだしたりするなどという事態が起こりはじめている。

また第二次大戦後、アメリカを始めとする帝国主義諸国が、押し進めた大量生産・大量消費型Ⅱ欧米物質主義的な生産関係によって、「北」諸国への一挙的な富の集中がもたらされ、その対局に「南」の諸国に対する絶

対的貧困が訪れている。世界人口の十六%にあたる十一億人余の人々が今日、明日の命も知れない状態にさらされている。

こんな矛盾が許されているのだろうか。しかもこの矛盾は人為的に日々拡大再生産されているものであり、現行生産関係の編成の在り様をしかるべく変革することによって、超克することは全く可能なのである。それにもかかわらず、南からのすさまじい収奪は止まるところを知らず、近代工業は自らの在り様を捉え返そうともしない。

この現実を前にして、われわれはなんとしてもこの搾取と収奪の構造を変えたいと思うし、本当の意味で平等な社会を作りたいと心から思う。廣松氏のいうエコロジー的価値の提唱も、まさにこのような意を含んだものとして理解するのではない。

それでは廣松氏のいうエコロジー的価値とはどのようなものであろうか。

いわゆるわれわれの前史である産業化以前の社会にあつては、システム化されていたり自覚的な対処ではなかったにしても、人間生態系を調和させていくような生活態度や生活規範が確かに存在していた。例えば文化人類学の研究によれば、狩猟・採取民社会にあつては、乱獲をタブーとする生活規範・価値規範が存在していたし、農耕民の社会においては施肥・輪作・休耕など資源枯渇を防止するために様々な工夫がされている。

また人口調節という問題についても、農業社会が生態学的な亜極相（モノクライマックス）に達すると墮胎やいわゆる「間引」によって人口を農業生産力の水準に合わせていくような価値観が当為のものだったといわれる。

近代産業文明が確立するにおよんで、そういった価値観が転換をせまられた。つまり生産技術の向上によって人口扶養力が「革命的」に飛躍したのである。そのうえ近代工業は石油や天然ガスなどの地下資源を始めて人

類にもたらししたが、同時にそれは副産物や廃棄物を大量に環境内部に吐きだしたのであった。それは生態系の崩壊を意味する。

さらに市場経済の論理が導入され、資本の増殖が価値化されると金銭の収支が主要な問題になり、エネルギー次元であるとか、殊に配慮すべきエントロピー次元での収支を規矩（規則）にできない構造がうみだされているのである。

廣松氏はここで、従来これを解決するはずであった既成「社会主義」諸国や、正統派「共産主義」理論の計画経済にあつては、「とうてい生態学的な価値評価基準を規矩にしていない。」（注2）とする。要するにスターリン主義的な計画経済にあつては、「生産力第一主義」というか資本主義と同様の経済政策の中身しか持ちえないのであつて、同じ土俵の上に立っている限りこれを根本的に止揚することは不可能であるということだ。

しかし前章までで見てきたように、マルクスの根本的な意図は、（主体——環境）系の自己運動である生態学的発想を包括したものにほかならない。ゆえにマルクスの切り開いたこの基底的な志向に沿って、現在の歴史的現実に変わる新しい規矩を確立することは、とりもおさず、生態学的な視座に立脚した、新しい計画経済の原理を確立していくことであり、具体的には市場価値的・労働価値説的なそれに代わる、新しい規矩としての生態学的価値基準を定式化することにほかならない。

それではこのエコロジー的価値をどのように宣揚していくのか。残念ながら廣松氏自身も認めているように、この問題は未だ問題意識の表出に止まっていて、充分具体的な課題として論述されているわけではない。その意味では廣松哲学の未決の課題である。

しかしブントはこの間、廣松哲学の実践論への越境を辿ってきたものではなかったか。そこで彼は「正義」の概念について、現行の支配体制下で間主体的に「是」と認められている通用的価値体系に対し、妥当的な価値を

掲げて立ち上がる必然を訴えたのである。ここでの妥当的価値の中身こそ、まさに人類生態学的価値を規矩とする、未来に開かれた価値観にほかならない。

そうであるならば、まさに死ぬ直前までマルクス唯物史観の発想とその射程を、現代社会の矛盾を解決するオルタナティブとして発信し続けた、アクティビストの意思を引き継いでいくのが残されたわれわれの努めというものであろう。

注1 —— 講談社学術文庫『生態史観と唯物史観』P359

注2 —— 同 P368

四、反省と問題意識

昨年の三月十六日の朝日新聞で、廣松渉氏が「東北アジアが歴史の主役に」という投稿をして、そのなかで価値観の変換ということに触れ「物質的福祉中心主義からエコロジカルな価値を中心に据える価値観への転換」ということを主張していた。当時私などはどう考えてもそれを理解できずにいたのだが、『SENKI』で「侵略の思想を問い返す」という特集をしたときに、『近代の超克Ⅴ論』を読み、そこでの彼の思いに触れたとき、

余命幾許もない廣松氏が、闘う勢力としてのわれわれに對して、どうしても言っておきたかったのだろくなと理解できたのである。

この文章は、そういった廣松氏の思いを引き受けていこうという思いの中で、昨年くらいから読みはじめていた『生態史観と唯物史観』の学習ノートをまとめたものである。しかし私自身の不勉強もあって、あまりトータルに廣松歴史哲学の思想を捉えてきていないと思う。特に人類生態系の内部編成について、生産物交換を視軸にして、文化人類学との対話を深めつつ書いた、第二部の「人類生態系と生産物交換——覚書」の内容には全く触れえなかった。もともと生態学とか文化人類学といった方面には、殆ど関心がないので、サクセションとかクライマックスとかいわれてもほとんどチンプンカンプンの状態で、わからない分、政治的論断になってしまったところもある。

今後はそのあたりをもう少し補いつつ、廣松氏の言う「エコロジイ的価値」の中身についても深めていきたいと思う。

そこで今後の問題意識として押さえておきたいのが、『生態史観と唯物史観』のなかでも触れられている、今西学派（シュレー）との対質である。廣松氏は「今西理論といえば、あの「変わるべくして変わる」というフレーズで有名な進化論、あの「棲み分け論」で周知の生態学、それにまた公知の生物社会論があり、…今西氏の高弟梅棹氏の生態史観は、創唱の時点ではそこまでは言えなかったとしても、今西学派のその後の展開を配視して位置づければ、この学派の人間学部門での諸研究に立脚しつつ且つそれらを直接に統括する人類生態史観の第一次素描であった」（注1）と大絶賛しているが、考えてみると今西学派というのは京大人文研に集う「京都学派」の謂にほかならず、廣松氏は『近代の超克論』でのいわゆる「京都学派」との対質を引っ張っているのだな、と理解できるのである。

今西錦司や梅原猛、上山春平、桑原武夫などによって構成されている、新京都学派の発想には、高坂正顯や西谷啓治、高山岩男、さらには西田幾太郎といった「近代の超克」に連なる思想が引き継がれているのではないかと思うし、廣松氏が梅棹忠夫の生態史観を評価するのもそういった背景があるのではないかと思う。

特に今西錦司については、その著書『生物の世界』のなかで解説者、上山春平が述べているように、生物学者でありながら「明治以来の数少ない独創的な哲学者の一人」(注2)であり、独自の理論体系をもっている思想家であると思う。今回は深められなかったが、今西自然学については今後は是非深めてみたいと思っている。

廣松氏が亡くなって一年が過ぎようとしている。思えばブントに結集した当初、廣松氏の『唯物史観の原像』を買い、なかなか読むことができずに「日本語にして日本語にあらず」などと思ったものである。今でも難しいと思うが、少しずつでも意味を理解しながら読み進めていきたい。そしてドイツ語と難解な哲学用語との間に見え隠れする、彼の飽くなき思いにこそ答えていきたい。

(1995.8)

注1 —— 講談社学術文庫『生態史観と唯物史観』P6

注2 —— 講談社文庫『生物の世界』P174